

# カルチャー・ステレオタイプはなぜ 遁滅させる必要があるのか

— 共同体主義批判の視座から —

倉地 曉 美

Why Cultural Stereotypes Must be Eliminated :

From a Critical Perspective towards Communitarianism

Akemi KURACHI

## 動機・目的

筆者は、異文化間の対人的相互作用による文化学習が、いかに文化的相互理解を促進させるかというテーマに即した実践研究に従事してきた。その一環として、7、8年ほど前、筆者は上記の研究テーマに関心を持っている有志の日本語教師と社会人と一部の大学院生を加えてネット上で意見交換を行っていたことがある。送信されてくるメールには、職場やボランティア活動で顕在化する異文化の諸相や、相互理解の難しさについての語りが多かったが、ある日、海外の日本語教師から、カルチャー・ステレオタイプを全面に表出する内容のメールが舞い込んできた。最初は、異文化的状況に追い込まれ孤立状態にある教師が、フラストレーション解消のためにメールを利用し、一時的に浄化を図っただけであり、すぐに暴走してしまったことに対する内省のメールが来るか、あるいは誰かが、そのメールの送り主をなだめるか、諫める形で事態は収束するものと楽天的に考えていた。ところが、そのメールに触発するような形で、カルチャー・ステレオタイプを正当化するようなメールが次々と配信され、ネット上のやりとりはどこまでもエスカレートするばかりであった。それらのメールをめぐって当然、彼ら対筆者の間で、ML上で激論を交わすことになったが、筆者がカルチャー・ステレオタイプ、特に日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ遁滅の問題に取り組むようになったのは、このやり取りの中で受けたショックに端を発するものであったと言っても過言ではない。

何がショックであったかと言えば、現場の教師、あるいは大学院生といっても日ごろ非常勤などで既に教壇に立ち恒常的に日本語学習者に接し、異文化間の対人的相互理解にも関心を抱いているはずの

人々が、カルチャー・ステレオタイプに対して危険性を抱いたり、表出を抑制したりするどころか、以下の①から⑤のような態度なりスタンスなりを頑強に保持しているということを筆者自身全く想定していなかったことに対するショックであった。その5つの態度とは、すなわち、彼らが①カルチャー・ステレオタイプなものを見方を、紛れもなく正しい異文化に対する理解の仕方であると受け止めていること、②または「カルチャー・ステレオタイプを持つてはいけない」と教えられてきたが、一体それの何がいけないのかよくわからないと思っていること、③あるいは、カルチャー・ステレオタイプこそ、何よりも便利で有効な、世界の人々を理解するためのツールであるという確信をもっていること、④それゆえに、カルチャー・ステレオタイプで異文化理解をすること、又は他者の前でそれを表出することに対して、何ら危機感も問題も認識していないということ、⑤上記の①から④の考えに全面的に同調するわけではないが、さりとてステレオタイプの何が問題なのか、しっかりと主張をもち、それを表明しようとするものがほとんどいなかったことである。その中には、異論はあっても、(実際カルチャー・ステレオタイプに対する議論は、火に油を注いだように短時間でエスカレートしやすく、信奉者の語り口は断定的で、熱狂的な信者の特定宗教に対する信仰にも近い、侵犯不可能な聖域さながらの様相を呈していたため)あえて異議を唱えることは大変なエネルギーを要することであり、メーリング・リストにそれだけのコミットをすることの対価を考えて、傍観の構えに入った者もいたことは否定できない。

いずれにしても、そのときはまだ、「異文化接触経験が浅いため、ステレオタイプな見方に偏った日本語教師ばかりが集まってしまったのかもしれない」と思ってもみた。しかし、それから日本語関係

者が、カルチャー・ステレオタイプに対してどのようなスタンスを保っているのか注意深く観察するようになって程なく筆者は、日本語教師の中では、ステレオタイプに対する気づきを持っている教師のほうが、むしろマイノリティなのではないかという確信を強くするようになった。吉野(1997)は英語教師、異文化間カウンセラーのみならず日本語教師も日本人論の伝播によって、文化的差異をめぐる言説の再生産に加担していること、文化間の類似・共通性が無視され、ステレオタイプ化された文化的差異の言説が過度に繰り返し強調されていることを明らかにし、こうした異文化間コミュニケーション論の影響によって「外国人とうまく意思疎通できないときに、文化を言い訳にしたり、微妙さを重視する日本の思考様式は外国人には分からないという考え方が、在日外国人の社会的適応を阻害している」(p.255)と論じているが、管見によれば、日本語教師、異文化間カウンセラーなど「異文化」との関わりを生業としている職業人や准専門家のカルチャー・ステレオタイプの実態解明に取り組んだ目ぼしい実証的な研究成果はない。

カルチャー・ステレオタイプがマジョリティの日本語教師や学生を支配し、紋切り型の世界観、学習者観が正当化されている限り、教師は真の文化理解に到達し得ないし、教師のかかる文化観が、学習者の文化学習に与える影響は深刻である。そこで、まず実態把握の必要性に鑑みて、筆者は平成13-14年度の科研で、外国人学習者の学習支援に当たる教師のカルチャー・ステレオタイプという誰も進んで踏み込まない聖域にあえて分け入ることにした。

一連の調査の目的、方法、手順、結果、考察については、既に様々なところで論じているので、改めて深く説明するつもりはないが、最初の調査は2002年夏に実施したもので、関西、中四国、九州の大学・日本語学校・ボランティア教室のいずれかで日本語を教えている男女8名の調査協力者に、それらの教育機関で日本語教師の仕事に携わっている教師(専任・非常勤・ボランティア)123名へのアンケート配布を依頼し、91名の調査票を回収した(有効回答率73.98%)。

本稿では上記のアンケート調査の結果をふまえて、カルチャー・ステレオタイプはなぜ問題なのか論議し、最後に法哲学の見地からの、カルチャー・ステレオタイプを擁護する共同体主義に対する批判的な論点についても言及したい。

## 日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ

上記の質問紙調査の結果、ステレオタイプが有益である、あるいは通減の必要がないと回答したものは、全体の1割程度(12.68%)、ステレオタイプが危険で通減の必要があると答えたものは全体の2割程度(21.13%)であった。危険または通減の必要性があると答えたものは、7割程度(66.20%)であった。これだけを見ると一見、ステレオタイプの問題を認識し、気づきをもっている者が多いような印象を受ける。しかし「教師として日頃どのようなカルチャー・ステレオタイプを持っていますか」という17項目に具体的なステレオタイプを書き込む文章完成法による質問に対して、半数以上の項目に何らかの記述をし回答をしたもの(以下ではステレオタイプ数が多い者と呼ぶ)は88.61%、半数以下しか回答しなかったもの(以下ではステレオタイプ数が少ない者)は9名(11.39%)にすぎなかった。しかも、ステレオタイプの危険性と通減の必要性を認識し、かつ具体的なステレオタイプ数も少ない日本語教師は、全回答者中1名だけである。

## ステレオタイプはなぜ問題なのか

この調査結果は、日本語教師の約1割がカルチャー・ステレオタイプを有益あるいは通減の必要性がないものと考えており、さらにステレオタイプの危険性または通減の必要性を一定意識していても、「ポジティブな、あるいは中立的なカルチャー・ステレオタイプなら持っていて、あるいは表出しても何ら問題がないのではないか」と言う考えが彼らの中で大変支配的であることを物語っている。それに対して、以下ではカルチャー・ステレオタイプはなぜ問題なのかについて論じるが、そのために、(1)まずはポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの基準の問題について触れた上で、(2)ネガティブなステレオタイプの弊害について、(3)さらに、ポジティブ、あるいはニュートラルなカルチャー・ステレオタイプの弊害について考察を進めたい。

### (1) 肯定的・否定的・中立的なステレオタイプの基準

前述のとおり、日本語教師の中にはカルチャー・ステレオタイプが肯定的あるいは中立的なものであれば、問題がないと言う考え方を持っている者が多

い。ここでは、様々なステレオタイプの弊害を論じる前に、

まず何が肯定的なステレオタイプで、中立的で、否定的かという点について検討を加える必要がある。たとえば、「〇〇人はおとなしい」というステレオタイプがあったとしよう。これは「おとなしさ」というものに価値を置くものにとっては、プラスのイメージを喚起するかもしれないが、積極的に活発であることに価値を持つものにとっては、負のイメージを生起させるだけである。また、「〇〇人は宗教的である」というステレオタイプは、見方によってニュートラルな（+ - どちらでもない・どちらもありえる）ステレオタイプとも捉えることができるから、「宗教的でないことが不遜である」と考える人々にとっては非常に肯定的なステレオタイプとなるし、逆に「宗教的であることが保守的で科学の進歩発展の妨げに繋がる」と信じている人々にとっては、否定的なステレオタイプとして捉えられよう。さらに、キリスト教原理主義者が、キリスト教の信仰厚い信者によって構成される社会集団に対して、「彼らは宗教的である」という場合と、イスラム原理主義者の集団に対して「彼らは宗教的である」と言う場合とでは、前者に対する「宗教的である」という意味合いと後者に対するそれとでは、意味するところが正反対である。従って、単純に、「肯定的なのだからいい」とか、「中立的だから問題がない」などと判断することはできないのである。

## (2) 否定的なステレオタイプの問題性

否定的なステレオタイプの弊害については、多くの指摘がなされており、ことさらここで多くの紙面を割いて議論するまでもない。にもかかわらず、質問紙調査に協力した日本語教師の中でも若干名（3.80%）が、「否定的なステレオタイプは未知の異文化世界で、危険やトラブルを避けるために不可欠かつ有効な道具である」と言うような回答をしていた。例えば海外旅行をする場合に、事前に「〇〇人は危険だ」と言うことを知っていれば、そこでは〇〇人に対して警戒心を持って接し、油断せず慎重に行動できるから、犯罪被害に遭わなくても済むというのである。しかし、自身が外集団の中に飛び込み、外集団のメンバーから「あいつらは残忍で、狡猾だから」などと、十把一絡げにネガティブな烙印を押され、排除され続けたとしたらどうだろうか。それでも「ステレオタイプは有効な道具だ」などと

言っているだろうか。

外集団に対するネガティブなステレオタイプは、外集団に対する排除や差別の原因となる。ナチスドイツによるホロコーストやルワンダの煽動放送に触発された被害者100万人以上とも言われるジュノサイドは、ネガティブで単純な、外集団に対するカルチャー・ステレオタイプが政治的な意図を持って新たに創出、あるいは既存の所信が最大限に利用され、増幅された帰結として、最もわかりやすく悲惨な史実である。カルチャー・ステレオタイプは人々の生活圏、生存権を奪うのみならず、人間としての成長発達の可能性の芽をも摘み取るのである。Gordon (2000) は、非先住民文化にあるステレオタイプによって、先住民の若者が学習意欲と、努力をしようという気持ちをいかに喪失するかを明らかにしている。

ところで、「内集団に対するネガティブなカルチャー・ステレオタイプは内省的であるがゆえに問題がない」と言う見方もあるが、果たして本当にそうだろうか。Brown (1995) は、ステレオタイプはその対象が持っている想定される属性をその通りに作り出す自己成就的な性格を持つ可能性があると論じているが、自己成就の予言と偏見との関係については、Merton (1949) によって既に指摘されている通りである。例えば、「日本人は言語コミュニケーションが苦手である」というカルチャー・ステレオタイプが自分を日本人であると確信している人々の間で内在化されることによって、言語的なコミュニケーション能力の欠如が助長されるし、「日本人は曖昧である」というようなステレオタイプによって、「日本人」のプロトタイプである曖昧な言語行動が、自らを日本人だとアイデンティファイする気持ちの強い人々にとっての行動規範となり、直裁的な表現を行おうとすることや、バーバル・コミュニケーションの発達に大きな制限が加えられるのである。同じように「女性は論理的ではない」、「黒人は知的能力が低い」などといったカルチャー・ステレオタイプに絡めとられ、自分は所詮「女性だからどうせ無理なのだ」「黒人だからやるだけ無駄なのだ」と頭から決めつけてかかることによって、ある種の能力を発揮させることができなくなってしまうのである。

## (3) 肯定的・中立的なステレオタイプの問題性

初めに論じたように、ポジティブ、中立、ネガ

ティブなステレオタイプと言うときの、その基準は何かという本質的な問題に加えて、それがマジョリティ集団であれマイノリティ集団であれ、特定の文化・社会集団に帰属する多様性に富んだ一人一人の構成員を、単純な紋切り型で均質的なものとみなすこと、集団の内部にある多様性を考慮しようとしないうことをよしとし、そこに何ら問題を感じえないことには、大きな陥穽がある。この点については、後の部分でさらに詳しい議論を行う。

また、内集団に対するポジティブなカルチャー・ステレオタイプは、外集団に対する排除・差別の原因を生む。ドイツ民族は選民であるとか、大和民族は優秀であるなどといった自民族中心主義が高揚されることによって何が引き起こされたかは言を俣たない。確かにマイノリティ集団の成員が、抑圧された集団の集団的アイデンティティを回復できない限り、抑圧から解放されないとする多文化主義者の主張も理解できないわけではない。しかし、内集団が単一文化主義的で単純な集団的アイデンティティを獲得するや否や、集団内の差異が過度に極小化され、集団間の差異が過度に強調されることによって、外集団に対する敵対意識、排除や、差別意識が鮮明になるのみならず、内集団に周縁が生まれ、中心と周縁との間で新たな排除、差別の構造が生み出される原因に繋がるのである。

加えて、集団的アイデンティティの形成（回復）、獲得にカルチャー・ステレオタイプ（認知的な誤謬）が政治的に活用されることの危険性を看過することにも大きな問題がある。人間が特定の文化・社会集団から何らかの影響を受けることは否定できないが、我々の思考や行動様式、価値観の一切が、特定の共同体（帰属集団）の価値観に完全に規定されているわけではない。文化・社会集団の内実は多様性にみちており、一貫した均一性を持っているわけではない。その上、我々が帰属する社会集団・文化集団は、決して唯一つではない。さらに帰属する多様な集団での我々の役割や立場、関与の仕方もそれぞれに異なり、その中で形成される価値観、言語行動様式、アイデンティティは決して一元的なものではない。一例を挙げれば「帰国子女は英語がべらべらですごい」というステレオタイプは英語のできる帰国子女にとっては、日本社会への社会参加をするうえで、非常に有利に働くポジティブなステレオタイプであると言える。しかし、英語圏以外の英語に接する機会の少ない国から帰国した子供たちや、英

語圏にあっても様々な理由から英語に接する機会が余りなかった子供たちにとって、周囲の「英語がべらべら」という周囲からの過剰な期待（きめつけ）は迷惑千万なものでしかない。過剰な期待が外れた場合には、「帰国子女なのに、英語もできないのか」と一転して厳しい眼差しが向けられる。「ポジティブでさえあれば、外集団に対するステレオタイプは、相手に対する好意的な見方、興味、関心に結びつくから、むしろ有益である」と言うような単純な結論づけはできないのである。

self-fulfilling prophecy（自己成就的予言）に関連して、ネガティブなステレオタイプは自己実現にマイナス影響を及ぼすが、ポジティブなステレオタイプであれば、むしろプラス影響を与え望ましいのではないかといった考え方もあるかもしれない。しかし例えば、ある特定の民族集団、人種が押しなべて優秀である、卓越しているということは、同時に、それ以外の民族集団、人種に帰属するものは須らく、凡庸、あるいは劣等であることを意味するのである。ある人種・民族などの集団に帰属する・あるいは集団の一員としてカテゴリー化された人々が、フィルターのかかった成就的予言の呪縛によって、ある種の可能性を最初から諦めざるをえない状況や、能力発達の機会を閉ざされるような状況が作り出されているとするならば、これを無批判に望ましいとは、言えまい。

人間集団を一元的、均質的にとらえることは、思考の節約であり、自己の世界像を容易に手早く安定させることはできたとしても、同時にそれは、上述のような様々な由々しき問題を含むのである。

## カルチャー・ステレオタイプは必要悪で、放置するしかないのか

質問紙調査の回答者である日本語教師の中には、カルチャー・ステレオタイプは必要悪であり、放置するしか仕方がないという考え方を示すものがあった（倉地 2003）。カルチャー・ステレオタイプは必要悪であり、我々はそれをなすがままに任せるしかないのだろうか。

確かに60年代後半から、80年代前半の心理学研究においては、50年代半ばから始まった Allport (1954) 以来の接触仮説 (contact hypothesis) に基づくステレオタイプ減滅を目的とした研究の流れに反して、ステレオタイプを正常かつ合理的な認知過

程と主張する立場をとる者 (Tajfel 1969) や、通減不可能説を提示する立場の研究者 (Hogg & Abram 1968, Taylor 1981) もいた。しかし80年代後半から90年代にかけて、Devine (1989), Devine, Monteith, Zuwerink, & Elliot (1991) らの認知心理学的な研究を皮切りに、カルチャー・ステレオタイプ通減の可能性や方向性を示唆する研究成果が次々に発表されている (Everhardt & Fiske 1996, Crocker, Major, & Steele, 1998)。そこでは、異文化接触の体験が内在化されていくプロセスにおいて、偏見づけられていない信念の活性化を意図的に図っていくことによって通減が可能であることが示唆され、異文化接触の質 (深化) の重要性が唱えられている。換言すれば、カルチャー・ステレオタイプは必要悪であり、放置するしかないわけではなく、個々人の認識の持ち方とたゆみない努力によってこれを通減することができるという見解が示されているのである。

## センの共同体主義批判：集団的アイデンティティの多元性と可変性

最後に本稿では共同体のアイデンティティについての若干の議論を一定踏まえておきたい。それは「カルチャー・ステレオタイプの通減は、共同体のアイデンティティを否定する働きにつながる」という考え方に対して一定の見解を示しておく必要があると思われるからである。

カルチャー・ステレオタイプの通減が、共同体のアイデンティティの否定につながるという考え方は、カルチャー・ステレオタイプ=共同体のアイデンティティという前提なしには生まれない。こうした考え方を正当化するためには、認知の誤謬とも言われる歪んだ文化の型 (カルチャー・ステレオタイプ) を共同体のアイデンティティの中核に据えることの根拠や妥当性は一体どこにあるのか、検証を必要とするのではなかろうか。

ところで共同体のアイデンティティに対する政治哲学の議論といえば、チャールズ・テイラー、ウォルツァー、サンデルらによる共同体主義 (Communitarianism) の理論が思い浮かぶが、1998年、Oxford 大学における Romanes Lecture で、共同体アイデンティティの多元性と (合理的選択が可能であるという) 可変性に着目し、共同体主義の問題点を指摘しているのが、アマルティア・センである。セン (2003) は、個人を自己中心的な孤島とみ

なす見方は避けて当然であり、社会的アイデンティティが人間の行動に重要な影響を及ぼしていることは確かであるという。又、共同体意識や仲間意識が、我々にとって大切なものだという信念も軽視できないものであり、こうした社会的アイデンティティについての我々の考えと密接に関係していると認めながらも、集団的アイデンティティにおける多元性、選択、合理的判断を否定することは、暴力や野蛮のみならず、今も昔も変わらない抑圧を生み出す原因となる可能性があるという主張するのである。

そして、共同体主義がアイデンティティというものを、発見するものであり、選択するものではないと主張するのに対して、センはたとえある基本的な文化的態度や信念が、我々の合理的判断に影響をおよぼすことがあるとしても、合理的判断を完全に決定してしまうことはない。文化の及ぼす影響は確かにあるし、重要ではあるが、選択の余地は残っている。それに文化はそれ自体、その内部でかなりの多様性を持っており、多様な態度や信念が、大雑把に括られた同じ文化の中に共存しているといっている。共同体やアイデンティティの持っている認知的役割は重要だが、合理的判断に基づく選択の可能性が、こうした影響のせいで排除されてしまっているわけではない。選択が永遠にないとか、合理的に考えることができないと思ったりするような思い込みこそが、もっとも人の心を縛り付けるものなのだと論じている。

国境を越えた人々のアイデンティティは、民族や政治的な単位区分以外の分類、すなわち階級、ジェンダー、あるいは、政治的・社会的信条などに基づいた連帯関係が含まれている。国籍や市民権の重要性を否定することはできないが、我々が分け持っている人間としての責務は、民族や国民の一員であることによるのみ成り立っているわけではない。我々が持っているすべての所属関係をただひとつの支配的なアイデンティティ——国家組織あるいは国民——に服従させてしまえば、多様な人間関係が持っている力や幅広い関係性が見失われてしまう。国家の国民としての政治的信条は、大切だが、この政治的信条が、他の形態の集団とのつながりに基づく信条や行動より優先されることはないというセンは説く。さらに彼は、違った文化を認知的、道徳的な孤島として扱う共同体主義の傾向に懐疑の目を向け、我々の多様な帰属性やアイデンティティを取り扱うに当たっては、もっと選択と合理的判断の余地を設

けておかなければならないと論じるのである。

社会的アイデンティティが支配的な役割を演じる共同体主義は、「政治的にはこのアプローチのために、行動や制度について、異文化間での規範に関する判断ができなくなったり、時には異文化間の交流や相互理解の可能性を妨げたりするような結果を招きかねない」というセンの见解を、多文化間の教育問題に取り組む我々は、極めて重要な指摘として真摯に受けとめる必要があるのではなからうか。

## 参考文献

- 倉地曉美 2006a 「外国人学習支援者のカルチャー・ステレオタイプと異文化間トランスに関する研究」平成15-17年度科学研究費補助金基盤研究成果報告書 研究代表者：倉地曉美
- 倉地曉美 2006b 「カルチャー・ステレオタイプからの脱却」『大学論集』Vol.37. pp.149-165
- 倉地曉美 2006c 「カルチャー・ステレオタイプ」倉地曉美編『多文化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク, pp.66-81
- 倉地曉美 2005 「日本語教師とボランティアのカルチャー・ステレオタイプに関する研究：質問紙とインタビュー調査の分析結果から」『広島平和科学』Vol.27, pp.117-135
- 倉地曉美 2004 「カルチャー・ステレオタイプの危険性・運滅の必要性を認識しない教師とボランティアに関する分析」『日本語教育学研究』広島大学大学院教育学研究科 Vol.14, pp.9-15
- 倉地曉美 2003a 「ボランティアと日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ：認識と自己抑制に関する研究」『広島平和科学』Vol.25, pp.81-108
- 倉地曉美 2003b 『留学生のカルチャー・ステレオタイプとその対処法に関する研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究成果報告書 研究代表者：倉地曉美
- セン, A. 2003 『アイデンティティに先行する理性』細見和志訳, 関西学院大学出版会
- Sen, A. 1999 *Reason before Identity: Romanes Lecture for 1998*. Oxford University Press.
- センブリーニ, A. 2003 『多文化主義とは何か』三浦信孝・長谷川秀樹訳 白水社
- 森村進 1985 「リベラリズムと共同体主義」桂木隆夫・森村進編『法哲学的思考』平凡社, pp. 7-39
- 吉野耕作 1999 『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会
- 若松良樹 2003 『センの正義論：効用と権利の間で』勁草書房
- Allport, G. 1954 *The Nature of Prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley
- Brown, R. 1995 *Prejudice: Its Social Psychology*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Crocker, J., Major, B., & Steele, C. 1998 Social stigma. In D. Gillbert, S. Fiske, & G. Lindzey (Eds.) *Handbook of Social Psychology* 4<sup>th</sup> Edition, Vol.2, pp.504-533.
- Devine, P. 1989 Stereotypes and Prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*. Vol.56, pp.5-18.
- Devine, P., Monteith, M., Zuwerink, J., Elliot, A. 1991 Prejudice with and without compunction. *Journal of Personality and Social Psychology*. Vol.60, pp.817-830.
- Everhardt, J. & Fiske, S. 1996 Motivation individuals to change: What is a target to do? In C. Macrae, C. Stanger, & M. Hewstone (Eds.) *Stereotypes and Stereotyping*. N.Y.: Guilford Press. pp.369-415.
- Gordon, J. 2000 *The Color of Teaching*. Routledge Falmer.
- Hogg, M., & Abram, D. 1988 *Social Identifications: A Social Psychology of Intergroup Relations and Group Processes*. Routledge.
- Kukathas, C., & Pettit, P. 1990 *Rawles: A Theory of Justice and its Critics*. Polity Press.
- Merton, R. 1949 *Social Theory & Social Structure*. Free Press.
- Sandel, M. 1982 *Liberalism and the Limit of Justice*. Cambridge: Cambridge University.
- Tajfel, H. 1969 Cognitive aspects of prejudice. *Journal of Social Issues*, Vol.25, pp.79-97.
- Taylor, S. 1981 A Categorization approach to stereotyping. In D. Hamilton (Ed.), *Cognitive Processes in Stereotyping and Intergroup Behavior*. Lawrence Erlbaum.